

---

# 日没の都

ナシオカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日没の都

### 【Nコード】

N3905Z

### 【作者名】

ナシオカ

### 【あらすじ】

料理人の少女、スーシャは実は転生者。不思議な能力を授かっただけの、育ての親の教えを守って一切使わず、前世からの夢だった料理人としての人生を歩んでいた。

料理人として人生を謳歌するスーシャだったが、一度だけ魔が差すように使ってしまった力のせいで人生が狂いだしてゆく。メロドラマ風目指します。

力を使つてはいけないよ。  
毒蛇がお前を殺しにやってくるからね。

「まったく、今日で最後だったのに、今日の今日までお仕事かあ」

愚痴を零しながら、神殿の長い階段を下ってゆく少女は、料理人のスーシャだ。毎日三度の食事時に、大勢の料理人達がこの階段を使い、皿を上げ下げする。神殿内に調理場があれば苦労は無いだろうが、神殿にナマモノは持ち込んではいけないそうだ。

これから汚れた皿を見習いに渡して、自分の朝食を済ませ、その後は……

スーシャの顔がにまりと綻んだ。

「その後は、カンテグラード！」

小さく喜びに叫び、階段を駆け下りる。皿がカチャカチャと鳴るが、割れたって構わない。明日はもう自分は違う空の下にいるのだからカンテグラード。芸術と学問の都。全ての美しいものと醜いものがあつまる場所。武器と毒薬の魔都。詐欺師と泥棒の国。

呼び方は様々な小さな中立国だが、スーシャにはどうでもいいことだった。そこが美食の都であるかぎり、地獄にあつたって飛び込み

たいと思うのが料理人というものだ。

ふと、階段途中で足を止めたスーシャは眼下に広がる美しい景色に目を止めた。

この神殿に料理人見習いとして入ったのは七歳の時だった。周囲の景色など見る間もないほどに仕事に追い立てられてきた。

しかし、改めて見るとこのサリナル教の聖地、バスガルクは本当に美しい。

森を切り開くように作られた白亜の神殿が立ち並び、中央の道の石畳は薄緑色の高級石材が惜しむことなく敷き詰められ、その上を上位神官達が乗った金と紫で飾られた白い馬車が行き来する。贅を凝らした一帯は、サリナル教の潤沢な資金力を誇示しているようだ。

森を抜けたあたりには、ここトルファナ帝国の首都が広がる。薔薇色の大理石を使った特徴的な建築群は、この白い神殿群といい対比になっている。

遠くまで来ちゃったもんだな……。

スーシャはじつと景色を見つめる。遠い遠い自分の故郷　日本を自然に思い出していた。

医師として必死に働いていたあの頃。

前世のスーシャは紛争地帯でのフィールドワークに明け暮れていた。素晴らしい仕事だと人は褒めるが、虚しかった。助けても助けきれない。両手で掬った砂が指の間からサラサラとこぼれ落ちてゆくようなあの日々。

自分の無力さに心が折れるのはすぐだった。

何か言いたげな同僚の視線から逃げるようにして日本に帰国して、人間ドックに再就職して……

それからの人生を、スーシャは思い出したくなかった。

自分は逃げたのだという後ろめたい気持ちはずっとついてまわり、

いつしか世の中を皮肉って生きるような人生を送ってしまった。  
何もかもが面白くなく、人生の色々な事がうまくいかなかった。  
スーシャのせいで嫌な思いをした人も沢山いただろう。親にも友人にも恋人にも心配をかけた。  
急な大病にも、ホツとしたくらいだ。  
前世のスーシャはつまり、死にたかった。あの時、逃げた時から、スーシャの心はもう死んでいたのだ。本当に死ぬると思って楽になつたくらいだ。

やめよう。

頭を振って、スーシャは息を吐き出した。昔を思うといつも息苦しくなる。

何故か前世の記憶を持ったまま、この異世界へと生まれ変わってしまったが、スーシャは今度の生に満足していた。

神殿を抜けた森に捨てられていたスーシャを拾ってくれた育ての親である老婆はとても優しくかった。

老婆はもう亡くなってしまったが、自分は前世からやってみたかった料理人という職業にもちゃんと就いている。昔と違って、仕事には誠実に向い合って頑張っている。

生まれつき妙な能力は備わっているが、老婆の言いつけ通りに全く使ってこなかった。

「人生、上手くいってるなー……」

ポツリと呟いて、スーシャは皿を抱え直した。

階段を降りきり調理場のある棟へと向かう途中には、屋根のない水場がある。そこは身分の低い下位神官達が洗濯をする場所だった。

上位神官達の衣服は、神官以外が触れると穢れるとあって、洗濯や刺繍、縫製までもが全て同じ神官の仕事として割り振られる。

勿論、このような仕事は最初から中位神官である貴族出身の神官や、下位神官でも裕福な商家の息子などにはさせられない。結果、スーシャと似たような境遇である捨て子や貧しい家の出身の下位神官達が一手に引き受けているのだ。それが神殿の現実だ。

その水場で、今日は擦り切れた神官服を纏った子供が、手を赤切れで真っ赤にしながら洗濯をしていた。年の頃はスーシャより5つほど下だろうか。

気の毒だな……。

だが、仕方がない。スーシャだって幼い頃から似たような仕事をこなしてきたのだ。だが通りすぎようとしていたスーシャは、思わず小さく声を上げてしまった。

「あつ……血？」

子供の神官服の背中から、じんわりと赤いものが滲みだしてきたからだ。

中位や上位の神官達に打たれたのだろう。可哀想だが、これもよくあることだ。だから、いつものスーシャなら通り過ぎていただろう。それが出来なかったのは、その子供の擦り切れた服があまりに薄いせいで、子供の背骨をくつきりと写していたからだ。

その瘦せた背中では、スーシャに昔を思い出させた。あの日々に両手からこぼれ落ちた砂を。

「ねえ。パン食べる？ ほら、余りだけど」

気づくと、スーシャはパンを千切って子供の目の前に差し出してい

た。しかし子供はそのパンを見ようともしない。

「食べなよ。お腹空いてるでしょう」

「……いない」

愛想のない子供だ。もしかしたら、それ故に疎まれているのかもしれない。

こちらを見る子供は、顎で切り揃えられた黒髪に緑色の瞳の、容姿だけならとても可愛らしい子だった。

スーシャは「ほら、食べなさい」と、まだ温かいパンを子供の口に押し込んだ。肌はガサガサで、唇の端も切れて血が滲んでいる。よほど栄養状態が悪いのだろう。

ついでに上位神官が手を付けなかった野菜のマリネも口に押し込んでやる。子供は面食らった顔で、だが口はしつかりモゴモゴと忙しく動かしている。徐々に明るくなる目の光に、スーシャは嬉しくなって微笑んだ。

「美味しいでしょ、この私がつつたんだから当然だけどね！」

実際、腕はいいはずだ。スーシャの若さで上位神官付きの料理人というのは、ものすごい出世なのだ。

女であるスーシャに度々セクハラや八つ当たり気味の嫌味をぶつける上位神官だったが、それでも実力だけでまだ十代の女を登用してくれた事には、スーシャはそれなりに感謝している。

そして、その功績と才能ゆえに、スーシャはカンテグラードへの留学が決まったのだ。

「本当ならお肉もあげたいけど、残ってないんだ」

子供の頭に手を伸ばして髪をかき混ぜて、スーシャは気づいた。手

がぬるりと滑る。頭も打たれて、出血しているのだ。スーシャに触れられて痛かっただろうに、子供は嬉しそうに目を細めている。そのことがスーシャの胸をついた。

今日の午後にはカンテグロードに旅立つ。もうここには足を踏み入れなければ、あるいは……？

大丈夫かもしれない。いや、きっと大丈夫だ。この子さえ黙っていれば、きっと大丈夫。だってこの子の髪は顎まである。耳たぶが隠れるんだから。

「……じつとして」

きよとんとした子供に真剣な顔で「今からすること、誰にも言っちゃだめだよ」と言い聞かせる。指先から『力』が溢れ出す。

『力を使ってはいけないよ』

育ての親の声が蘇る。だけど、一度くらいなら。もう遠くへ行くんだし、きつと一度くらいなら。

指先が熱くなるにつれ、そこから白い光が溢れる。その光をかざすように子供の頭上に掲げた。

数秒して、光が収まって、スーシャは少年の髪をかきあげ、耳たぶを確認した。白い耳に嵌めこまれたように、血の色の宝石が輝いている。勾玉のように曲線を描き、不思議な紋章のようなものが内部に浮かんだ、あの宝石。

スーシャはごくりと唾を飲み下した。

怪我もすっかり治っている。少年はその事に気づいたようで、傷ひ



とつない手のひらを目を丸くして凝視している。

「い、いい？ この事は誰にも言わないで。耳たぶにおかしな石がついているのも、誰にも見られちゃダメだから……！ 言ったら……言ったら、そう。毒蛇がお前を殺しにやってくるよ」

「……」

「分かった!？」

子供は、こくりと頷いた。そして恐る恐る口を開く。

「あなたの……名前は？」

「ス、スイリヤ。スイリヤっていうの。でももうここ辞めるから。や、辞めて故郷に帰るの。明日探してもいないから」

スイリヤは一般的な女性の名前だ。スーシャはそう名乗って、子供に背を向けた。

子供はじつとスーシャを見つめていた。

スーシャの姿が見えなくなっても、そこにずっと立っていた。

スーシャは知らない。

自分がカンテグランデに発った後、聖痕を持った神官が現れて大騒ぎになったことを。

その神官が数年後、最上位神官として教会に君臨し、腐敗し墮落した教会を立て直すという名目で多くの神官やそれに連なる貴族を激しく弾圧し、帝国に肅清の嵐が吹き荒れたことを。

そして、その最上位神官が自分に聖痕をさすけた聖女を探していることを

最上位神官が画家に描かせた絵は各地へ配られ、聖女の搜索は続いていた。

その絵には最上位神官が出会った銀髪の女性が描かれている。髪を編んでまとめ、粗末な服を纏ったその女性は天使のように美しく、右手には何かの入った籠を抱えている。そして光る左手は跪く少年にかざしている。

『聖女の導き』と名付けられるこの絵は、今は十数枚も存在していたのだ。

その後、この絵はたった一枚しか残っておらず、サリナル教の最も大きな神殿の奥深くに大事に保存されている。当の最上位神官が聖女への不敬であるとして、手元への一枚を残し、他の十数枚を処分したという話である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3905z/>

---

日没の都

2011年12月13日09時56分発行